

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 WANG Ding  
学位 博士(文学)  
学位記番号 新大院博(文)第58号  
学位授与の日付 令和2年9月23日  
学位授与の要件 学位規則第3条第3項該当  
博士論文名 清末における湖北省日本留学生の総合研究

論文審査委員  
主査 准教授 柴田 幹夫  
副査 准教授 池田 英喜  
副査 准教授 武藤 秀太郎  
副査 佛教大学歴史学部教授 麓 慎一

博士論文の要旨

本博士論文は、清末における中国人の日本留学について解明したものであるが、その中でとくに湖北省を中心に日本に留学した中国人留学生の实態とその特質を分析したものである。湖北省という一地域に限定した学位論文であるが、ただ地域研究にとどまらず、中国人留学生史研究への拡がりを十分予見させられるものである。分析対象となった時期は1895(明治28)年から1911年の辛亥革命前後である。

本論文の構成は以下の通りである。

緒論

第1節 研究対象と背景

第2節 先行研究とその問題点

第3節 課題設定と論文の構成

第1章 清末における日本留学史の概要

序説

第1節 清朝公使館内の東文学堂

第2節 中国における初期の日本語教育

第3節 日本留学の嚆矢とされる公使館学生

第4節 留日学生に対する教育政策

第5節 留日学生に対する管理への模索

第6節 速成教育の是正

小括

第2章 湖北留日学生の初期活動について

序説

第1節 清末における中国雑誌の概況

第2節 雑誌『湖北学生界』の創刊

第3節 雑誌の内容

第4節 『湖北学生界』から『漢声』への改名

第5節 湖北同郷会について

小括

第3章 湖北軍事系留日学生の活躍と帰国後の進路

序説

第1節 湖北武備学生の派遣について

第2節 振武学校と陸軍士官学校について

第3節 湖北留日学生の帰国後の動向について

第4節 救国思想からナショナリズムの誕生

小括

第4章 湖北留日学生の留学経験とその影響

序説

第1節 調査経緯

第2節 麻城三兄弟の事例Ⅰ

第3節 陸軍士官学校で学んだ藍天蔚の事例Ⅱ

第4節 東斌学堂に学んだ自費留学生・向巖の事例Ⅲ

小括

終章

緒論では、これまでの中国人留学生史研究における先行研究と問題点の整理を行っている。これらを踏まえて博士論文の課題が設定されている。

第一章「清末における日本留学史の概要」では、清末における留学生史の流れや全体像を把握するうえで、日中両国の留学生派遣・受入政策と制度の変遷を考察している。清朝政府は、アヘン戦争以降、軍事・海事技術者・通訳人材の確保・養成に迫られることとなった。そこで

清朝政府は「洋務運動」という近代化政策を推進し、欧米へ留学生を派遣したが、あくまで陸海軍や造船、通訳の人材養成という目的であり、体制改革には消極的であった。ところが、日清戦争後、近代国家建設のため、軍事系人材をはじめ、法律・政治・教育に通じる人材が大量に求められるようになり、近くて安い日本への留学が次第に主流となった。一方、教育面においては、清国の状況に応じて実施された「速成教育」は、教育機関・寄宿舎・制度面などが十分に整えられていないという問題が露呈してきたが、それを単純に「失敗」と評価するわけにはいかないと論じている。

第二章「湖北留日学生の初期活動について」では、「湖北同郷会」の会員により創刊された『湖北学生界』、『漢声』および『旧学』を主な史料として取り上げ、湖北留日学生の初期活動を論じている。さらに「湖北同郷会」に焦点をあて、当会の「雑誌部」によって発行された雑誌の特色、販売経路、運営方式、掲載内容について詳細に分析した。その分析から留学生の思想が「郷党観念」から「狭義の民族観念」へと変化し、結果として『湖北学生界』から『漢声』という民族色の強い雑誌の改名に繋がったことを明らかにしている。また、雑誌停刊後も、「湖北同郷会」の活動は停止せず、西洋と日本の教材・書籍の翻訳、同郷人の招待案内などさまざまな活動に積極的に取り組んでいたことを解明した。

第三章「湖北軍事系留日学生の活躍と帰国後の進路」では、湖北軍事系留学生たちの派遣背景と経緯、在籍状況、帰国後の進路を考察している。日清戦争後、李鴻章の影響力が低下した一方で、張之洞をはじめとする地方総督の勢力が台頭した。当時、日本政府や陸軍参謀本部は張之洞に接近しつつ留学生派遣の働きかけをおこなった。その結果、張之洞は1898年に「湖北武備学堂」から二十名の学生を選出して日本へ派遣した。本章はその経緯を明らかにした。さらに「成城学校」、「振武学校」、「陸軍士官学校」をてがかりとして、湖北留日学生の入学時期・卒業人数・専攻科目についての基本データを実証的に論証した。また、帰国後の進路について、一部の陸軍士官学校卒業生は新軍総理練兵処、陸軍部、軍諮処（後に軍諮府）に任用された。そのほか多くが湖北新軍、地方の軍事教育機関で活躍し、湖北軍事の近代化において大きな役割を果たしたことを解明した。

第四章「湖北留日学生の留学経験とその影響」では、清末湖北留日学生の子孫への聴き取り調査や関連史料に基づき、六名の湖北省出身留学生を事例に、日本での留学経験が個々の生涯にどのような影響を与えたのか、という点を考察した。

終章では、以下のように学位論文が明らかにした点を総括している。第一に、湖北省留日学生が留学中でいったいどのような行動を展開したのか、またそれらの諸活動が地域社会へどのような貢献をしたのか、という点を解明した。第二に、成城学校・陸軍士官学校で学んだ軍事系留学生をてがかりとして、帰国後の彼らは中央政府と地方政府の人材争奪をめぐるどのように対応したのか、という点を解明した。第三に、湖北省で実施した清末留日学生の子孫対

する三つの事例（合計六名）を取り上げ、彼らの留学経験と意義、またその影響という点を解明した。

以上が博士論文の要旨である。

#### 審査結果の要旨

審査において本学位論文は、以下の点で高く評価された。

第一に、清末における中国人留学生史をただ単に中国人留学生史の問題としてとらえるのではなくて、当時の政治史、外交史などの面から考察し、また従来中国人留学生史の定説でもあった1896年に十三名の学生を日本に派遣したことから始まるという留学生史の起源を遡ること1882年から中国公使館内にあった東文学堂で受け入れていたことを論証したことが高く評価された。

第二に、湖北省という一地域の留学生たちの発行した雑誌『湖北学生界』を丁寧に分析し、地域の郷党意識から中国という民族意識に転換した経緯がまとめられており、それが新しい雑誌『漢声』に繋がっていったことを明らかにした点は評価できる。

第三に、湖北省からの留学生の特徴として、軍事系の留学生が多いという点を明らかにした。それは辛亥革命に繋がるという指摘も評価できる。

第四に、鉄道関係の留学生と軍事系の留学生とを関連付けて、辛亥革命の起点となったことを明らかにするとともに、張之洞自ら東京に鉄道関係の学校を創設したことを明らかにしたことも評価できよう。

第五に、湖北省留学生の留学体験について、現地での聞き取り調査を行い、彼らの残した『日記』を読み解き、また子孫に聞き取り調査をするというオーラルヒストリーを重視したことが評価された。

全体としても留学生史のみならず、政治史、外交史という点にも十分に言及している。また郷党意識から民族意識へと変わっていくことについて、日本での留学体験が基層にあるということを、留学生によって発行された雑誌、留学生の子孫への聞き取り彼らの残した『日記』などの分析を通じて明らかにした点について高く評価できる。

ただ問題点も少なくなかった。中国留学生史及び中国近代史、外交史、政治史そして日本近代史との有機的なつながりや民族意識の高まりについて、例えば章炳麟が引き起こした「蘇報事件」など中国国内の動きが考慮されていないなど改善すべき点も見られるが、史料に基づいた実証的で斬新な研究であり、今後の研究の進展にも大いに寄与できるものと判断できる。

なお本論文の二つの章が、新潟大学大学院現代社会文化研究科の『現代社会文化研究』や『日本語・日本文化研究』に掲載され、また新潟大学の『環日本海研究年報』や中国武漢大学出版

社から発行された『日本語言文化論叢』に掲載された。また東洋文庫発行の『東洋学報』にも掲載される予定である。

以上のことから本論文は留学生史のみならず、政治史、外交史という歴史分野にも深く関わっているので、博士（文学）の学位を授与するのに値するものと判断した。